



# 会田実の教育実践に関する一考察 : 「横のつながり」の形成の試み

松本, 圭朗

---

**(Citation)**

神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 15(1):41-52

**(Issue Date)**

2021-09-30

**(Resource Type)**

departmental bulletin paper

**(Version)**

Version of Record

**(JaLCDOI)**

<https://doi.org/10.24546/81012989>

**(URL)**

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81012989>



## 会田実の教育実践に関する一考察 —「横のつながり」の形成の試み—

### A Study on the Educational Practice of Minoru Aida: Attempt to Build “Human Relations”

松本 圭朗\*

Yoshiro MATSUMOTO\*

**要約：**本稿は、北海道と静岡県で活躍した会田実の教育実践の内実を明らかにするものである。会田は生活綴方史における重要な人物とされつつも、戦後教育実践史の俎上には載せられてこなかった。会田は北海道において、子どもが労働せざるを得ないほどの生活環境を非文化として捉え、「文化とは誰のものであるか」と自問し、文化の獲得を企図する。その試みは、子どもへの労働要求の否定ではなく、子どもが労働によって得た賃金を用いた書籍等の共同購入として具体化された。すなわち、文化の獲得に主眼を置きながらも、その内実是人々の関係づくりにあった。静岡県の小学校へと転任した会田は、教師が理解できない子ども——「わからない子」——に対する教師の認識や振る舞いによって、勉強などが「できない子」が生まれると考える。会田は、「わからない子」を理解するための方法として、「教室だより帳」や詩などの生活綴方を用いた教育実践を展開する。さらに、学級での「助け合い」をおこなうことで、「できない子」を含んだ「横のつながり」を形成していた。つまり、会田の教育実践には、知識の獲得や、文章表現技術や社会認識の育成ではなく、子どもを含めた人間関係の構築——「横のつながり」の形成——を企図する点が通底している。

**キーワード：**会田実 生活綴方 教育実践 横のつながり わからない子

#### 第1節 はじめに—会田実と戦後教育実践史

戦後の日本における教育学は、教育実践を導きの1つとして探求を続けてきた。例えば、今井誉次郎の『農村社会科カリキュラムの実践』（1950年、牧書店）や、無着成恭の『山びこ学校』（1951年、青銅社）などの実践記録が相次いで刊行された。その1つが、後藤彦十郎が編纂した『魂あいふれて』（1951年、百合出版）である。『魂あいふれて』には、今井や無着、近藤益雄など24人の教師の実践記録が収録されている。本稿では、『魂あいふれて』に「とうげの松の木」を寄稿した会田実を取り上げる。

会田実（あいだ・みのる；島康樹）は、1915年に北海道で生まれる。1935年に北海道旭川師範学校を卒業し、教師となる。幾度かの転勤を経た後、1949年に静岡県の駒越小学校に赴任する。戦後の会田は、石橋勝治や寒川道夫、師井恒男らとともに教育界の新人とされていた（大田1949）。さらに会田は、各地の教師と交流を深め、組織づくりをおこなう。その成果は第1回静岡県作文研究大会（1953年8月4-5日）として結実する。また、雑誌『教育』1952年4月号には、「共同研究・部落のなかの子ども」（A43、斎藤健一1952、山田・大田・勝田1952）が掲載される<sup>1)</sup>。しかし、会田は病によって1953年12月19日に38歳で夭折する。

没後の会田は、「戦後の地方の作文運動家の先達として第一に挙げなくてはならない」（今井1957:274）人物とされている<sup>2)</sup>。また、日本作文の会による『生活綴方事典』（1958年、明治図書出版）には、

「会田実」の項目が設けられ、『『ハガキの会田』と、人びとからいわれ、「戦前の綴方教師たちが仲間を組織できなかったことから学んで、みんなのなかで生きる教師になろうとよびかけていった」（武蔵1958:614）と紹介されている。会田は各地の教師や学者などに「ハガキ」を送り、交流を生み出していた<sup>3)</sup>。

会田の遺稿集には勝田守一や今井が追悼文を寄稿している<sup>4)</sup>。会田の「ハガキ」について、勝田は「人々が、なやまされたというあの有名なハガキの抗議」（勝田1954:18）と回顧し、今井は「地方を代表して中央に対して抗議していた」（今井1954a:29）と述べる。また、会田は各地の学校を巡り、組織づくりをおこなう。勝田は、「どうすれば、父兄大衆と共に手をつなぎ、職場でも浮かないで、じっくりと子どもの成長にとりくむ仕事を深めて行けるかということが、会田さんの『足』でもって語られたようなものだった」（勝田1954:25）という。今井も、「足を棒にして県下を歩きまわって、地がためをしていた」（今井1954a:30）と評する。

このように会田は、「ハガキ」や「足」を用いた組織づくりの観点から評価されている。そのため会田は、北海道や静岡県の生活綴方史において言及されてきた（伊藤2005、井沼1992a;1992b、江口2001、大塚1981、道作50年史編集委員会編2005、永岡1993、船山1987、北海道作文教育協議会編1964、無署名1983）。にもかかわらず、管見の限り、会田の教育実践を仔細に検討したものはない<sup>5)6)</sup>。つまり生前の会田の組織づくりへの評価に比して、会田の

\* 神戸大学大学院人間発達環境学研究科博士後期課程

（2021年3月31日 受付）  
（2021年7月25日 受理）

教育実践は戦後教育実践史の俎上には載せられてこなかった。しかし、このことは、会田の教育実践が戦後教育実践史上において意義をもつ可能性を否定しない。したがって、会田の教育実践の内実を明らかにする必要がある。

会田の教育実践を検討するにあたって、会田の教育実践に対する会田自身の認識と、周囲からの評価との隔たりは看過できない。すなわち、会田が「生活綴方の旗手」との周囲の評価を自覚しつつも、「わたくしは、けっして生活綴方をやった男ではない」と述べている点である (A48:52)。一般に生活綴方は、「リアリズムの思想にもとづき、子どもたちに実生活に取材したひとまとまりの文や詩を書かせ、また書かれた作品を教材にしながら彼らのものの方・感じ方・考え方に働きかける」(船橋 2001:440)ものとされる。しかし生活綴方の定義は多様である。そのため、会田の教育実践を明らかにするにあたっては、生活綴方を定義したうえで会田の教育実践を検討するよりも、会田の教育実践を跡付けたうえで、会田の生活綴方観を描出する必要がある。

以上より、本稿では、会田の教育実践の内実を明らかにすることを目的とする<sup>7)</sup>。まず、第2節では会田の生涯を概観する。つぎに、第3節では北海道での教育実践を跡付ける。その際、会田が初めて公にした論考を中心として、会田の問題意識についても言及する。第4節では、静岡県での教育実践を跡付ける。この時期の会田の実践記録は、特定の子どもの中心とした記述が散見される点で、それまでのものとは形式的に異なる。したがって、会田が着目した子どもを中心として教育実践を跡付ける。そして、第5節では、会田の生活綴方観を検討する。そのうえで、第6節では会田の教育実践の内実を明らかにする。

## 第2節 会田の生涯

本節では、会田の生涯について概観する。なお、会田の略歴は表1の通りである。

表1：会田実の略歴<sup>8)</sup>

年	経歴
1915年 6月	誕生
1922年 4月	厚岸尋常高等小学校尋常科入学
1928年 3月	厚岸尋常高等小学校尋常科卒業
4月	厚岸尋常高等小学校高等科入学
1930年 3月	厚岸尋常高等小学校高等科卒業
4月	北海道旭川師範学校本科第一部入学
1935年 3月	北海道旭川師範学校本科第一部卒業
4月	歩兵第28連隊入営
8月	歩兵第28連隊除隊
9月	白糠第一尋常高等小学校着任 <sup>9)</sup>
1939年 4月	北海道旭川師範学校専攻科入学
1940年 3月	北海道旭川師範学校専攻科卒業
4月	共栄尋常小学校着任
1944年 4月	厚岸国民学校着任
1945年 9月	阿寒郡茂雪裡国民学校着任
1946年 4月	阿寒郡茂雪裡国民学校校長となる
1948年 5月 <sup>10)</sup>	江別町公立江別第一中学校着任(社会科)
1949年 9月 <sup>11)</sup>	清水市立駒越小学校着任
1953年 12月	没

1915年、会田は漁師の子どもとして北海道釧路国厚岸町に生まれる。会田は2才の時に母を亡くす。その約1年後、父親は継母を迎える。しかし会田は継母との折り合いが悪く、継母を「母」として認められないまま、祖母を慕って育っていく。会田が通った小学校には、その後も交流を続けることになる横沢宇宙<sup>12)</sup>と坂本亮<sup>13)</sup>が勤務していた。会田の担任も務めた横沢によれば、会田は「我が強くて思い立ったらどこまでもやり通す子」であり、「綴方など着眼も構想も、ほかの子にくらべて飛び抜けておとなびていたし、すぐれてもいた」という(横沢 1954:34-35)。

会田は高等科を卒業後、北海道旭川師範学校に入学し、1935年に卒業する。会田と同じ本科第一部2組には阿部秀一、また、寄宿舎には上級生として中井喜代之など、会田の周囲には後に生活綴方教師となる人物がいたという。しかし会田は、彼らから影響を受けることのない平凡な師範生であった(A74:191)。

卒業後の会田は、約半年の兵役を経て、横沢が校長を務める白糠第一尋常高等小学校に着任する<sup>14)</sup>。会田が初めての担任として受持ったのは5年生男子組であった。この時期の会田は、坂本と数回ほどの交流をもちながらも、坂本を見失い、その交流は途絶える(A74:191-192)。なお、会田は同僚の花井光子<sup>15)</sup>と出会い、結婚する。

会田は1939年に北海道旭川師範学校専攻科へ入学する。会田は翌年に卒業し、共栄尋常小学校に着任する<sup>16)</sup>。この時期、後に北海道綴方教育連盟事件と総括される治安維持法違反による教師の検挙が相次いだ。会田は、検挙された坂本が「アカイ」という話に共感するほどに、「時代の波に吞まれ、それを受け入れ、感激していく教師」であった。(A74:192)。戦後の会田は、坂本がヒューマニズムの道を歩んだのに対して、自身がファシズムの道に踊らされたことを対比的に回顧している(A74:193)。

その後、会田は、厚岸に戻って一緒に暮らさないか、という実家からの提案を受けて、1944年に厚岸へと帰郷し、厚岸国民学校に着任する。会田は、この時期のことを、「教師の『貧乏』が生んだ2つの笑話——教師の鳥蟹吉と、その妻の郁子の話——として記している(A31)。会田の実家は比較的に裕福であったにもかかわらず、会田の1カ月の給料が父の数日の稼ぎに及ばないため、家庭内の関係は悪化し、「この思慮のたりない継母よねと口やかましい蟹吉の実父常太との毎食ごと、食卓につくとはじめられる愚痴、訓示いやがらせが、つづいていく」(A31:24)生活を過ごす。さらに1944年の秋には、会田の慕う祖母が亡くなる。こうした事情から、1945年9月末には実家を離れる。

実家を離れた会田は、茂雪裡国民学校へと転勤する<sup>17)</sup>。茂雪裡国民学校は110名の子どもと、会田を含め3人の教師から成る小さな学校であった。1946年4月30日には、会田が茂雪裡国民学校の校長となる<sup>18)</sup>。しかし会田は、山村の教育問題の解決のための視野と知見を求め、都会の学校への転出を決意する(A74:54-55)。会田の送別会では、「部落はじまって以来、上部落も下部落も総出で、こんなに気持のいい送別会をするのは、こんどがはじめてだぞ。この先生、どっかいとこがあるんだな」(A74:56-57)と、会田に声をかける村民もいたという<sup>19)</sup>。

1948年に、会田は山村から札幌市近郊の都会へと転居し、江別第一中学校に着任する。ここでも貧困が問題となった。光子は、「父

さんと子どもと貧乏とが、私のからだを吸取って細くなって死んでゆく」(A31:22)という日記を残していた。

会田は病弱な光子の体調を理由に、温暖な静岡県へと転居する。会田は1949年の2学期に駒越小学校に着任する。年度途中であったため、翌1950年度より5年生の担任を務める。翌1951年度は、クラス替えがあるものの6年生を受持つ。その後は、1952年度に6年生、1953年度に3年生を受持つ。会田は学級文集『麦こき』(1951年度)、『麦こきの弟』(1952年度)を発行し、学校文集『石垣』にも携わる<sup>20)</sup>。その傍らで、会田は県下の学校を訪れ、教師の組織づくりをおこなう。会田の働きによって、静岡県下に12個の作文サークルが誕生した(井沼1992b)。会田は、1952年3月に開催された教育科学研究会全国連絡協議会全国大会(第1回)に参加した静岡県代表の約60名の教師の中でも齋藤健一とともに「一等地を抜き精彩ある」発言をした人物とされている(齋藤正男1952)。また、会田は日本綴方の会(後の日本作文の会)の会員であり(無署名1951)、生活綴方をもって全国的に名を馳せつつある人物とされていた(無署名1952c)。

会田が活躍した1950年頃までは、教師も生活の擁護を求めた時期であった(梶村1993)。会田も例外ではなく、貧困は切実な問題であった。会田は、「苦しければその苦しいなかから『大衆のなかのひとり』として、生きることを、さらに、その『大衆のなかのひとりの教師』として生きること」(A20:54)を考えていた。

### 第3節 北海道における教育実践

本節では、北海道における会田の教育実践を検討する。第1項で会田の教育実践を概観し、第2項で教育実践をめぐる思想について検討する。

#### (1) 教育実践の概観

会田は、「わたしが舌たらずのおかしな文をはじめて書いたのは、1947年の春頃だった」(A35:43)という。それは、雑誌『教育建設』に掲載された『「文化」とは誰のものであるか』(A1)である。この「文化とは誰のものであるか」を主題あるいは副題とする論考は3篇ある(A1;A2;A3)。これらの論考は、会田が茂雪裡国民学校に在職していた時に書かれた。会田は鶴居村茂雪裡を舞台として、「文化とは誰のものであるか」と問うていく。

会田は茂雪裡を「陸の孤島」とし、「人間のまじめさや正直や勤勉とは何の関係もなく、びんぼうや悲惨があるのだということを、腹の底までとっくりとおしえてくれたのは、このあらい北の山村だった」(A74:51)と述べる。会田は、村民が戦中のプロパガンダ——「皇軍の中核こそ農村出身の子弟によつて占められているのである」——によって、「生かすべからず殺すべからずの境まで腹一杯搾取され通してきた」という(A3:25-26)。それは戦後も続き、村民は「ただ黙々とたつきづづけている」にもかかわらず、「その代償としていささかの文化」も享受できないでいた(A1:16)。そのため会田は、「彼らは、そのはげしい勤勉な労働にあけくれするが故にいたましい動物のように甘んじてその非文化地帯に住まわねばならないのだ、というのであるか」(A6:22)と主張する。しかし会田は村の状況をめぐって、「教師が、いたづらにその現実をもって教育の敵とすることによつて、自らもまた、その現実以外に

は生きようのない村や部落の人びとや、また、こどもたちの敵になつてはならない」(A7:42)という。すなわち会田は、一方で文化を享受できない状況を問題とし、他方で村民が生きざるを得ない現実を認めていた。

茂雪裡の子どもは、登校までの時間に家事を手伝い、放課後は家畜の世話や畑仕事などを手伝っていた。それは、「こどもも兄や姉も親たちも、と・し・よ・りも一しよにひきこんでしまうはげしい労働」(A6:22)でもあった。会田は、「その親やきょうだいたちとおなじように馬のようによくはたらくこどもたちの裏側に、無知という紙がびたりとはらされている」(A74:51)と指摘する。会田は、労働による子どもの無知を各所で指摘する一方で(A3;A4;A15)、労働に勤しむ子どもの性格を「重厚素朴」(A3:25)、「純朴」(A4:2)と表現する。すなわち茂雪裡の子どもは、勤勉と無知とが一体となった子どもであった。

会田は、「子どもたちの敵になつてはならない」ことと、無知の克服を両立する必要があった。なぜなら、無知——知識の欠如ないしは学力問題——の克服を企図すれば、子どもの生活および労働を否定する「敵」となるからである。また、会田は「彼らの誠実と勤勉に、目を与えることはむずかしい」(A7:44)と述べ、知識の教授の困難さも認識していた。そのため会田は、「彼らから物を学びながら、彼らをその矛盾を見つめざるをえないところにおちこませる以外に、その目を敵の中に向けさせることはできない」(A7:44)という。会田は子どもに対して、知識の教授ではなく、社会的矛盾を見つめざるを得ない文化に「おちこませる」という方法を探る。この方法によって、無知は単なる知識の多寡の問題ではなく、文化を享受できない状態へと転換する。すなわち、会田は文化を享受できない状態を無知と捉えることで、無知の克服と、子どもの味方となることの両立を可能とした。

会田は子どもが文化を享受できない状態に対して、新聞や雑誌、本などを与えることを試みる。会田は書籍等を与える際に、「こんな陸の孤島にいても、いつまでもつづけてゆけるようなやり方」、「こどもたちが、それを通してじぶんたちの力に自信を持ち、ぐんぐんたち上つてゆくようなやり方」、「まわり道であり、くるしい道であっても、ここのこどもたちのためにほんとうに役に立つやり方」を考える(A15:25)。会田は、短期的な知識の教授のために書籍等を買ひ与えるのではなく、子どもの自信に繋がり、卒業後も自らの手で継続的な購入が可能となる方法を考える。

しかし「陸の孤島」と呼ばれる貧しい村では、書籍等の購読は資金の面から困難であった。会田は、子どもが10月頃になると薪割りや芋掘りなどの労働によって賃金を得ていることに着目し、子どもに書籍等の共同購入を提案する(A15:25)。子どもからは、「じぶんじぶんで取るのがあたり前ださ」、「じぶんたちはもうすぐ読めなくなる」といった意見が提出されたものの(A15:25-26)、書籍等の共同購入が決定する。

さらに、書籍等の購入には輸送手段の問題もあった。会田は新聞を取り扱う配給所に対して、新聞を届けるよう「ハガキ」を用い、時に配給所に赴き、交渉を続けるものの、その希望が通ることはなかった。後に、新聞社へ実情を訴える「ハガキ」を出すことによって、子どもは新聞の入手が可能となる。こうして、1947年2月には、『子供の広場』や『赤とんぼ』、『少国民新聞』が学級に入るように

なる。会田は書籍の管理係を定めるのみで、読書指導をおこなわなかった。自由な読書をおこなう子どもの姿を、会田は次のように紹介する (A3:26)。

ぼくの教室にこんな事実がある。／こどもたちが働らいた金で、昨春から「赤とんぼ」と「子供の広場」の2冊が教室に入れてあった。ぼくは全然こどもたちに任せたりで、ただだまってこどもたちが果して何をこのんで読むものかと見ていたのである。／ところが、昨秋にいたって「赤とんぼ」が落第してしまった。何だか「広場」よりおもしろくないといゝだしたのである。／こどもたちは何の惜気もないように、その年の7月末に働らき出していた除草代の一部を投じて、「広場」を残して、新しく「銀河」と「働らく実験室」の2冊を教室に入れてしまったのである。

その後、子どもは自ら購入物を決定するようになる。例えば、2カ月分の薪割り代1700円を使って、ドッジボール3個を購入している。また、防空壕を解体した木材を販売して得た1070円を使って、学校文庫を購入している。さらに除草代の一部の700円を使って、再び学校文庫を購入している。そして、1947年末には、茂雪裡国民学校の全3学級に『小学生新聞』を入れたいとの声があり、翌1948年1月には全学級に届くようになる。

## (2) 文化の獲得を企図した教育観

会田は、この時期の自身の文章に子どもの姿を意図的に登場させなかったという (A74:61-62)。会田は、「こどものことをいかに語ろうとし、いかに書こうとしているか、そしてそのための核心となるものを、教師がじぶんの中にどう持とうとしているか、そこにこそ教育があり、教育の問題があるのではないか」(A74:61)と述べる。会田は子どもの姿よりも、むしろ自身の言葉の核心に、教育の問題が存在すると考えていた。会田が3篇にもわたって問うた「文化とは誰のものであるか」——その反語としての「文化とは私たちのものである」——には、会田の教育の核心が存在する。すなわち、会田は「文化の獲得」を問題とした。会田は、この問題に対して、「組織的発言と抗議とたたかい——そのみが、文化とは誰のものであるかを決定する唯一の道に通じるものとなるであろう」(A2:18)と答える。「陸の孤島」では、自ら販路を求め、交渉しなければ書籍等の購入が困難であったように、自らの手で文化の獲得を試みなければ、文化は享受できなかった。会田は文化の獲得の方法として、「組織的発言と抗議とたたかい」を示す。

この背景には、単級学校・複式学級<sup>21)</sup>(以下、単複校)をめぐる問題も存在する。多くの教師は僻地への赴任を敬遠するため、単複校は人員不足に陥り、かつ、少人数ゆえに発言権もない状態であった。会田は、「しかるに、それらの人びとの地帯はむかし話そのままの非文化地帯として、その罪は彼らの上にかぶせられ、配流の月をながめさせられたかつての教師たちのあとに、こんにちにおいてももつとも弱体な教師群がその罪を問われようとしているではないか」(A6:22-23)という。会田は、「非文化」すなわち文化が享受できない状態と、教育整備が遅々とする状況を重ねる。そして会田は、単複校の教育環境の改善のために、「単複教師のすべてが手を

にぎろうではないか」(A6:23)と呼びかける。つまり会田は単複校の問題をめぐって、人々の組織化による文化の獲得という視点を提示する。

文化の獲得という視点は、茂雪裡での書籍等の共同購入実践だけではなく、江別第一中学校での実践にも引き継がれる。江別第一中学校の子どもは、自治会を組織化しながらも、社会科において教科書を用いた講義方式による教授を希望するという矛盾を示す (A21)。会田は、「自主性と共同性をとりもどさせるために、こどもたちの生活の組織化が第一だ」(A21:48)という。会田は「生活の組織化」を「教室や学校の生活をじつさいによくする」という意味で用いる (A21:44)。それは、すなわち文化の獲得でもある。自主性と共同性の育成のためには文化の獲得が必要であり、文化の獲得のためには自主性と共同性が必要である。

会田は、「文化とは誰のものであるか」と問うことで、文化を享受できない暮らしを問題とし、文化の獲得を目指す。そして、「組織的発言と抗議とたたかい」という答えを通して、自主性と共同性をもった人々の組織化を課題の克服の途として示す。

## 第4節 静岡県における教育実践

本節では、静岡県における会田の教育実践を検討する。第1項では、年度毎に教育実践を概観する<sup>22)</sup>。第2項では、会田の教育実践をめぐる思想について検討する。

### (1) 教育実践の概観

会田が転任した駒越小学校の学区では、商船大学や東海大学などの教員が住む住宅地、宗教団体の子どもが住む寮、半農半漁の農家、戦火を逃れてきた商家、という異なる人々が生活していた (H1952:48)。会田は多様な背景をもつ子どもを前にして、「この組を受持つてすぐに気づいた、横のつながりがまったくないならば勝手な気持を、何とかしてつながりをつけさせたい」(A24:51)と考える。会田は「横のつながり」の形成を試みる。

#### ① 1950年度の実践

会田は1950年4月に「菊江の記録」を書いている<sup>23)</sup>。菊江は学級や勉強に馴染めず、周囲から「変わった子」としてみられていた。例えば、「菊江さんは先生が話しているのに、下をむいて何かいたずらのようなものばかり書いていて、先生がちゅういすると、ほめられたとばかり、また帳面にむかって手をはしらせる」(A26:82)と綴る子どももいた。菊江は文字を書くことが苦手であり、その作文も意味を成さない文字の羅列であった。菊江は遠足について、次のように綴っている (A26:80)。

めあねりきんさんちるふあいんさんきんみちるふころるさんちくおんしのみてやるみちるきんさんさすむやけみしるきんさすむしやてみしる

会田は菊江の作文をめぐって、「じぶんにもひとにも意味のとれない文字を、えんぴつの先をなめなめ書きならべてゆく、痛々しい菊江の姿が、うかんでくるのだった」(A74:121)と記している。

ある時、菊江は数字を練習したノートを会田に見せる。これを見

た会田は、「ほう、菊江ちゃん偉くなったね。お丸をやるよ」と声をかけながら、無造作な丸付けをおこなった。しかし菊江は、その日の放課後から平仮名を練習したノートを会田に見せ、赤丸をせがむようになる。そして菊江は、ほぼ毎日、数字や平仮名を練習したノートを会田に見せるようになる。この菊江の姿は、今までとは異なった姿として友だちに評価され、時には友だちとともに、練習したノートを会田に見せることもあった。会田は、「気の毒な子菊江がみんなにいじめられ、仲間はずれにされ、当の本人もきつとあきらめたり、ひがんでいたりしたにちがいがなかったのがそうでなく仲よくなってきていることを、わたくしも、よかった、よかったという気持ちでいる」(A26:84)と述べる。

会田は菊江との関わりを踏まえて、「いままでできない子といわれてきた子どもたちが、たったひとつのことで、その時間あるいはその日わかったという喜びを、わたくしはクラスの子どもたちと一しょにそれを喜んでやる」(A74:115)ことを掲げる。会田は、「できないこと」に対する叱責ではなく、「わかったこと」を共に喜び、それを学級で共有することによって、「横のつながり」の形成を試みる。しかし、この試みは、60名以上の子どもが在籍する教育環境の中では、子どもと喜びを共有する以前に、「できたこと」や「わかったこと」の把握が困難であった。まず、一人ひとりの子どもとの関係づくりを通して子どもを知る必要があった。そこで、会田は子どもとの関係づくりを目的として、1950年2学期から「教室だより帳」と「きょうのことば」<sup>24)</sup>をはじめた。

会田は「教室だより帳」を用いて、数人の子どもの「たより」を書き、翌日に子どもから返信を受け取っていた。また会田は、放課後に「ホッと息ぬきした気持ちのままのことば」を「きょうのことば」として黒板に記して帰宅していた。会田は、「『教室だより』は母親たちがよろこんでくれ、わたしからその子あての『たより』は、子どもたちがよろこんでくれているが、『きょうのことば』は、あるいはわたし自身をささえようとして、毎日、だれもいなくなる教室に、わたしの影を書きつけているのかも知れない」(A74:123-124)と述べている。

「教室だより帳」には、次のような「たより」が記されている(A74:138-139)。

幸ちゃんへ(十月六日)／幸ちゃんが、ゆうきがでた、と書いてくれたので、うれしいな。いつもぼくがいうように、はじめからうまい人はいないのです。みんな一べんはへたなところから、だんだんじょうずになってくるのです。じょうずになる時に、一番だいじなのは勇気だね。幸ちゃん、とてもいいことに気がついてくれたんだよ。／しっばいしても、へたばらないで、ぐんぐんのびてゆく子になりなさいね。／それから、輝子ちゃんも幸ちゃんもいい子だから、仲よく一しょにもっともっとよい子になってください。小さな意地わるをして、ひとをこまらせるようなことにならないでね。幸ちゃんが、とてもいい子だという先生はよく知っているよ。／本を読むのは、えんりよしなくてやるよ。幸ちゃん、へたばるな。勇気だよ。勇気。いいね。

先生へ(十月七日)／私うれしく見せてもらいました。輝子ちゃんと私と一番なががいいのよ。このごろいじわるしなくなった

のよ。／私、先生にあてられたらすぐ立って、大きな声でよむね。／先生、またお手紙ちょうだいね。

会田は、幸子の勇気を評価し、いい子であると認めつつ、音読での発声や、友だちへの意地悪などの課題を励ます。会田からの評価と課題を受けた幸子は、会田からの「たより」に対して嬉しさをみせる。「教室だより帳」に対する肯定的な評価は幸子だけではなく、輝子も、「たよりは自分と先生だけのものだから、何でも安心して書ける。どんなことを書いてもしんばいないから、何でも書ける」(A74:148)と記している。会田は、「教室だより帳」を用いることで、子どもとの一対一での関係づくりをおこなう。

その一方で、黒板に書き綴られた「きょうのことば」は、会田と子どもとの関係が学級に開かれている。会田は、次のような「きょうのことば」を書き綴っている(A32:48)。

十月五日。／輝子、やす子、永子、幸子が、いま暗くなりかけた教室から帰っていった。おいたてられるようにして、やっと帰っていった。／こういう子どもたちが、組のしごとを一步一步すすめていってくれるのだと思う。／こんな子どもたちが、もっともっとでてくるにちがいない。だんだんよい子がふえてきているこの組だから。

会田は、「きょうのことば」に子どもの名前を出しつつも、学級への言葉かけを通して、子ども同士の関係づくりを試みる。

## ② 1951年度の実践

卒業間近の1952年3月20日に、学級文集『麦こき』50号が発行された。『麦こき』50号のテーマは、「私達はどう助け合ってきたか」である。その冒頭には、輝子と幸子の連名で「おけいこの助け合い」が書かれている(A42:1)。

私達は、この一年間おして、やって来た仕事は助け合いです。又、私達が一番よかった所は、助け合いをやる事です。初めのうちは自分が、いくらわからない所は、助け合いをやる事です。初めのうちは自分が、いくらわからない所があっても、皆にいわないで、はずかしがって聞きもしませんでした。又、おしえる方も、自分だけわかればいいという気持ちがあったので、しんせつにおしえては、やりませんでした。一学期通してやってきたが、あまりよくなった。三学期は、助け合いがしやすいように、男女まぜて、ならびました。みんな手をむすぶようになり、聞く人もはずかしがらずきくようになりました。おしえる方も、とてもしんせつになりました。この助け合いの詩は、二学期の中頃書いた作品です。その作品を、取っておいて、三学期のこの文集の時に、先生の家から、持って来て、のせました。この作品の中には、いろいろちがった作品などがのっています。／よくよんでいろいろちがっている事や問題を見つけて下さい。

会田は「横のつながり」を「助け合い」として掲げる。2学期に書かれた「助け合いの詩」のなかには菊江の詩もある(A42:4)。

分数のわり算のしているを／りとはいとを／わお数に木にどんな  
／私は／雪江さんおかいもらって／ $\frac{3}{5} \times 7$ をとのりはし／つ  
か1コぶんの1のでいとおつた／ゆるきでといかたなつた／とて  
いるかのどんないよいと／うらあるとろに／かないつり／私  
はのり数分を／りとはいとを／お数分を／木にどんな／私は／  
ゆき江さん／ $\frac{5}{8} \times 3 =$  とのりはし／つたか1コぶんの1ので  
いどこに／ゆるまでとい／なつかとて／いるかのど／んないま  
いとうら／あるだのに／かないのたり

この詩から、菊江が雪江に分数の問題を助けてもらっていたことが推察できる。「変わった子」とされた菊江は、文字の練習を通して学級の子どもに認められ、受け入れられていた。会田の企図した「助け合い」には、「変わった子」も含まれていた。

会田は、「助け合い」とともに、1951年度から、「詩」を用いた実践を開始する。この実践は、4月頃から詩を読みはじめ、5月になると詩を書き、6月には1人1冊ずつ用意したノートに詩を綴る、と展開していく。会田は詩を通じて、子ども理解を試みる。

この当時、静岡県では「骨なしの子」が問題となっていた<sup>25)</sup>。会田にとって「骨なしの子」は、「ものを考えぬく思考力」や、「困難とたたかいつづけて、それを克服していくような意志も努力」が失われている姿を意味する(A38:250)。その「骨なしの子」の1人が、テルオであった。テルオは毎日10円のお小遣いを貰い、家の手伝いをせずに自由に遊ぶ生活を過ごしていた。テルオは、「ぼくは、かあさんやとうさんのいうことは、ちっとしかきかない。あとの人のいうことはきかない」、「ぼくはちっとばかのつかいならやるが、くるまやとうくのつかいなどはやらない」、「ぼくは、おかねをもらうのはだいすきです」、と綴る子どもであった(A38:250)。テルオは「とうげの松の木」という詩を綴っている(A38:248-249)。

とうげの松の木は／かぜがふくと／松の木ゆらゆらと／ゆれながら／かぜが／ひゅっと／ならしながら／松の木はおれそうにまがる／そのときぼくは／むねが／どきどきとした／あれでもおれないのかと／びっくりした／松の木はつよい／とうげの松の木は／たいふうのとき／しおをよけるためにうえてある／松はいい木だとおもいます

会田は、「風」という困難に向かう松の強さをみつけたテルオにも、松と同様に困難に向かう強さを看取する。そして、会田はテルオに「お前だって、きっと、とうげの松の木みたいに、つよくなれるぞ」(A38:259)と声をかけたという。

会田は子どもに対して、困難に向かう意欲を求める。学級では、「人間が一番だいじなことそして人間がだいじだという場合、人間の働らいていることが一番多く、しかもそれが一番だいじなことだ」(A37:73)といった内容が話し合われてきた。この話し合いを受けて、輝子は家族の仕事を恥じながらも、「鉄くず」という詩を綴る(A37:73-74)。

私の家は鉄くず屋だ／詩集の題も「鉄くず」だ／毎日鉄くずをあつめている／鉄くずをあつめるのに／どんな苦心があるか／

みんなはしらないだろう／鉄くず屋は／いそがしい仕事だ／人に見られて／かたちのわるい仕事だ／だけど／何にもはずかしくないんだ／毎日／ほこりまみれになつてはたらく／おかあさん／私もいまに／あんなにほこりまみれになつて／はたらくんだ／人目のわるい仕事だが／それをやらなければならないんだ／いまから私も／まつくろになつてはたらくんだ／この苦心を／みんなにしらせるんだ／「鉄くず」／「鉄くず」をかいていくんだ／笑われたつてかくんだ

輝子は家族の仕事誇る詩を綴る一方で、「死」と題して、「わたしもいつか死ぬんだなあ／死なない薬がほしいなあ／人間は／死ぬために働くようなものだ」(A72:169)という詩を綴っている。輝子は母親の仕事ぶりから、労働と死を結びつける。しかし会田の学級では、輝子の「人間は死ぬために働くようなものだ」という言葉が問題となり、死ぬために働いているのではない、生きていくために働く、子どもを育てるために働く、などの意見が出たという(A72:170)。輝子は学級での議論を受けて、「問題を正しく解決する」という詩のなかで、「ほんとうに考えることなら、／組の中のどんな人でも、／正しく考え、／正しく見、／正しく解決していくのだ。／そして、／いつも笑顔のあふれている、／わたし達の組なんだ」(A72:173)と綴っている。会田は、輝子が「苦しさになえぬいて、生きていく」ためには、「みんなと手をつないではげましあっていくことが、何よりもだいじである」ことを掴んだと述べる(A72:174)。つまり、会田は輝子の事例を通して、輝子を含めた家族が置かれている労働環境それ自体ではなく、労働という困難に対する意欲や態度などの「骨なし」の状態を問題とし、生きる意欲や態度の形成には学級の繋がりが必要であることを指摘する。

### ③ 1952年度の実践

会田は、1952年に雑誌『教育静岡』の取材を受けている(H1952)。会田は取材に訪れたHに、「『自分が変わりうるといふ確心を子どもめいめいにもたせようと思っているんだよ』と語り、また、『笑わぬ子ども、笑えぬ子、こういう子どもが、わたしの子どもたちの中に一杯いたんだよ、笑わぬ子どもはなぜ笑わぬのか、笑えぬ子どもはその笑えぬわけはどこにあるのだろうか。私はまずそこから手はじめに、この子どもたちを見つめることにしたんだよ』と語っている(H1952:49)。会田は「笑わない子」に関心を寄せる。

「笑わない子」の1人が健治であった。健治は自身の名前以外、読み書きが困難であった。そのため、母親は涙を拭いつつも、「この子さえもっとしっかりしてくれればいいのにさあ」(A74:153)と健治を罵倒していた。会田は健治をめぐって、「健治の顔にニッと笑いをうかばせるもの、それはやっぱり健治の敵にまわるものからではなくて、健治を理解しようとする努力の側のものからではないのではなからうか」(A74:153-154)と述べる。会田は、「笑わない子」の理解を試みる。

「笑わない子」は健治だけではなかった。トミオは、「小柄で青白い顔に、いつでもうす白い鼻汁をたらしている子」(A45:29)であった。トミオは、授業中には下敷きや筆箱を触り、また、友だちにいじわるをし、嘘をついていた。そのため、健治と同じく、トミオは家庭でも出来の悪い子とされ、母親だけではなく祖母からも叱られ

ていた。会田は、トミオのいたずらや、叱られる行為などに関して、「お前からそれをみんなとりあげたら、お前はよい子になれるのだろうか」、「お前はほんとうにすきでそうなったのか」と心境を綴っている (A45:30)。会田は、トミオの「悪さ」を叱責するのではなく、なぜそうなったのか、を自問する。そして会田は、「トミオ君、ぼくといい友だちになろうな。よい子になれるよ。ぼくがトミオ君の味方になってあげるよ」(A45:32)と語りかける。会田は、トミオに対して「変われること」を示唆し、トミオに寄り添う姿勢を見せる。会田の姿を受けて、トミオはノートの落書きを消し、宿題をするようになる。会田は、トミオが初めて提出した宿題を学級に見せ、「トミオ君、こんなによい子になったよ」(A45:33)と学級に語りかけている。

## (2)「横のつながり」の形成を企図した教育観

「菊江の記録」と「この子だれの子」には、光子が計算問題を解けない次男を叱責するというエピソードが記されている。会田は、「次男坊を無知からすくいあげなければならないというねがい」(A74:116)や、「次男坊を何とかひと並みの水準までひきあげてやらなければならないという強い母親としての愛情」(A45:31)を感じる。その一方で会田は、母親の叱責によって次男の学習意欲や自信が減退する状況を踏まえ、「わが子のために幸福をねがう人間の悲惨さはどこにあるのかしら」(A74:117)、と問う。会田は、光子と自身とを重ね合わせ、次のように綴っている (A45:31-32)。

そしてそこから、むかしもいまもトミオは発生したし、またするように思われる。はじめは少しわからない子として。それが次第にわからなくなり、ついにはもうどうにもこうにも追いつくこともできない子として。そしてまたそれは、はじめははげまされたものが、次第に叱責となり、ついに悪罵があるいは放任となってゆく教師のあり方と結びついて。そして、できない子、バカという烙印。

会田は、駒越においては「できない」という子ども個人の問題に對峙したかに見える。しかし、「できない子」は、もともと会田が理解できない子——「わからない子」——として存在した。すなわち、「できない子」は、「わからない子」に対する会田自身の認識から生まれていた。そのため、子どもは誰でも「トミオ」になり得た。さらに会田は、「そしておそろしいことには、教師のそうしたふんい気に対して、むしろ抗議したい正しいヒューマニスティックな気持を強くいただいている教室のこどもたちまで、いつのまにかものおぼえのわるいものを厄介者扱いにし、きらうこどもたちにしてきていた」(A45:31)という。会田は、教師の眼差しや振る舞いによって、「できない子」を生み出すだけではなく、「できない子を嫌う子ども」も生み出すことを自覚する。会田は、「できない子」を生んでしまう自身の姿を問題としていた。つまり、会田は、「無知」を子ども個人の学力の問題としなかったように、「できない」ことも子ども個人の問題として把握しなかった。

会田は、「小さな教育技術」として、「クラスの下積みの子どもたちを、まずかわいがってやりたこと [原文ママ:引用者註]」(A64:

15)と、「どの子の心の中にも、生きがいのあることをさとらせてやりたいこと」(A64:16)、の2つを挙げる。会田の関心は、「できない子」、「笑えない子」といった「下積みの子」にあった。こうした子どもは、会田にとって「わからない子」であった。会田は子どもを理解し、寄り添い、見つめる方法として、「教室だより帳」や詩を用いた。そして、子どもの書き綴った言葉から、子どもの勇気や困難に向かう気持ちを看取り、生きがいを悟らせていた。小さな教育技術のうえに、会田は「助け合い」などを通じて、例えば「菊江」のような存在も受け入れる「横のつながり」を形成していた。

## 第5節 会田の生活綴方観

会田は、1950年頃から「教室だより帳」や詩などを用いた教育実践をおこなっていた。その一方で会田は、「いつのまにか、何とはなしに生活綴方の旗手のひとりみたいにおもわれるようになってきた」ことを自覚しつつも、「わたくしは、けっして生活綴方をやった男ではない」という (A48:52)。こうした会田の生活綴方に対する認識は、「若い作文指導者への夢」<sup>26)</sup>と「わたくしの綴方教育論」に示されている。

会田は後進の教師に宛てた「若い作文指導者への夢」のなかで、次のように述べる (A35:43)。

じぶんの見たり、きいたり、考えたり、感じたりしたことをハッキリ書ける子。できたらそれを美しく書きつづれる子をつくってゆきたいものだと思う。それは文学的なものと同時に社会科学的な目や技術をそだてるものとしての作文の復興。そしてその発展——ともいわれよう。

会田は、「文学的なもの」と「社会科学的な目や技術」を育てる生活綴方、すなわち文章表現技術や社会認識の育成を企図する生活綴方の在り方を認識している。しかし一方で、この生活綴方の在り方は「若い作文指導者への夢」であり、会田が実践し得ず後進の教師に託したものである。また会田は、「わたくしの綴方教育論」においても、生活綴方を「どこまでもじぶんたちの目で見、耳で聞き、体でつかみとってくる現実の事実をつみかさねていくことによって、ねばりずよく真実と真理を追求していく科学的、合理的な題と行動とをつくっていく」ものとして捉える一方で、「そこで、それではいったいどうしたらよいのか。そこからあとは、ぼんくらは[原文ママ:引用者註] わたくしはさじをなげだす。あとはみんな考えてもらいたい」と述べている (A48:54)。

しかし、会田が「教室だより帳」や詩などの子どもが自身の生活を書き綴った文章という意味での生活綴方を用いた教育実践を展開したのも事実である。会田は、自身の生活綴方について次のようにも述べている (A48:53)。

どいつの目玉もとろんとにごっていたり、あるいはボカンとしていて、そのくせいやにませていて、利己的かばらばら勝手に、なまけ者で、不勉強で、時々権力の目の色をうかがう奴ら。あるいはまじめで、正直で、勤勉であったとしても、はたらく人間こそ一番だいじな人間であることも、そういう人間の団結のすばらしさなどもしろうともしない奴ら。まして人間や社会

の進歩によせるすみきったあかるさもたくましきましろうとし  
ない奴ら。腰がたつた時には、泥くさい日本の貧乏の中で生き  
ているじぶんの受持の子どもたちの姿が、或いはそんな風にう  
つつたかもしれない。手あかによごれた誤字だらけの文にも  
なっていない文を読み、それに赤ペンをいれながら、それでも  
大方の時はそういう子どもたちの味方になり、笑ったりはげま  
したり、腹をたてたり、あせったり、ねばったりしながらつま  
かさねてきたもの。そうしてさいごには、綴方、このよいもの  
に生きるよるこびとはりあいをどの子の中にもあたえたもの。

ここには、会田の子どもに対する認識と、生活綴方の在り方が端的  
に示されている。会田は、子どもとの関わりのなかで、子どもに「生  
きるよるこびとはりあい」、すなわち生きがいをもたせる生活綴方  
の在り方を見出す。

以上のように、会田が「生活綴方をやった男ではない」と述べる  
とき、その含意は文章表現技術や社会認識の育成に主眼を置いた生  
活綴方をおこなわなかったという限定的なものである。会田は生活  
綴方による文章表現技術や社会認識の育成が求められていることを  
自覚しつつも、自身の教育実践では、そうした生活綴方を企図しな  
かった。なぜなら、生活綴方において文章表現技術や社会認識に焦  
点をあてれば、必然的に「できない子」が問題となるからである。  
会田は「できない子」ではなく、「わからない子」としての子ども  
に向き合う。会田は、生活綴方を書かせると「個性尊重」の意味  
がわかるとし（A46：49）、「たしかに正直に書くこと」（A48：53）  
を生活綴方の出発点とした。すなわち、正直に書き綴られた生活綴  
方には子どもの個性が現れる。つまり会田は、「わからない子」の  
理解の1つの方法として、そして、生きがいをもたせるものとして  
生活綴方を捉える。

#### 第6節 おわりに—会田実の教育実践の内実

本稿は、「ハガキ」や「足」を用いた組織づくりの観点から着目  
されてきた会田の教育実践について検討してきた。

会田が、戦後の茂雪裡において問題としたのは、非文化すなわち  
文化を享受できない暮らしであった。子どもにとって、この暮らし  
は労働を要求される暮らしでもあった。会田は教育を通して、子  
どもに対する労働要求それ自体の克服ではなく、あくまでも非文化  
の克服を試みる。なぜなら、子どもへの労働要求を問題とすれば、茂  
雪裡で暮らす人々の生活が成り立たないからである。また、非文化  
は自らの手で文化の獲得を試みなければ克服できなかった。そこで  
会田は、子どもが自らの労働によって得た賃金を共同出資し、子  
ども自身が読みたい本を選択し、購読する教育実践をおこなう。会  
田は江別においても、生活改善を企図し、自主性と共同性の必要を指  
摘している。また会田は教育実践だけではなく、単複校の未整備問  
題も文化の問題として把握し、「組織的発言と抗議とたたかい」を  
求めていく。すなわち、会田は文化の獲得を企図する一方で、その  
獲得は単独で成し得るものとは考えなかった。つまり、会田が戦後  
の北海道においておこなった教育実践は、文化の獲得に主眼が置か  
れているものの、その内実は人間関係の構築にある。

その後、会田は自らの教育的要請からではなく、光子の体調を理  
由として、温暖で文化的にも整っている光子の郷里のある静岡県へ

と移住する。茂雪裡では非文化それ自体が課題であるゆえに、村民  
は同等程度の生活環境にあった。その一方で、駒越では子どもの生  
活環境が大きく異なっており、子どもたちは「ばらばら」であった。  
そこで会田は、子どもの関係づくりを課題とする。会田は、「教室  
だより帳」や詩を用いていた子ども理解と、関係づくりをおこなう。  
そして、子ども同士の「助け合い」を通して、菊江やトミオなどの  
課題を抱える子どもも含んだ「横のつながり」を形成していく。会  
田は、戦後の茂雪裡から駒越に至るまで、子どもの「敵」ではなく、「味  
方」となることを一貫して主張している。すなわち、会田が形成を  
試みた「横のつながり」には、会田自身も含まれている。

こうした会田が活躍した1950年代当時の生活綴方は、一般的に、  
「生活現実に目を向け書き綴る中で、生活の主体者としての構えをつ  
くり、おこなっている子や生活の重い課題を抱える子たちとの仲間  
づくりの実践」（伊藤2001：46）を中心としていた。この点で、会  
田の教育実践は1950年代当時の生活綴方の1つの在り方である。  
しかし会田は、生活綴方を通じた文章表現技術や社会認識の育成を  
おこなわなかった。会田は、勉強の「できない子」は、教師が理解  
できない子——「わからない子」——から生まれると考えていた。そ  
の会田にとって生活綴方は、あくまでも、子どもを理解し、子ども  
との関係を築くために、子どもと向き合う方法であった。

以上のように、会田の教育実践には、知識や文章表現技術、社会  
認識の獲得に主眼を置くのではなく、子どもを含めた人間関係の構  
築——「横のつながり」の形成——を企図する点が通底している。  
それは、教師が、人間の生きざるを得ない生活と、そこで生きる子  
どもに向き合うことでもあった。

会田は、とくに駒越小学校において生活綴方を用いた教育実践を  
展開していた。そして生活綴方は、子ども理解の源流に位置する（田  
中2009）。ここで示唆的なのは、会田が北海道綴方教育連盟の業績  
を学ぶ必要を訴えている点である（A13；A25）。北海道綴方教育連  
盟について、例えば船山謙次は、「綴方連盟 [北海道綴方教育連盟：  
引用者註] のもつヒューマンズムの思想性は高く評価するが、北方  
性教育運動にみられる社会科学的思想の深さと比較するとき、綴方  
教育連盟 [北海道綴方教育連盟：引用者註] の思想的弱点を指摘し  
ないわけにはいかない」（船山1987：29-30）と述べている。北海  
道綴方教育連盟の思想的特質と、会田の教育実践に通底するもの—  
—そして、そのなかでの生活綴方——とを重ねるとき、会田の教育  
実践は、子ども理解の教育実践として戦後教育実践史の俎上に載り  
得ると同時に、北海道綴方教育連盟の後継としても位置づき得る。  
会田の教育実践は、過去の教育実践から何を継承し、その史的意義  
はどこにあるのか。今後の課題としたい。

#### 【凡例】

1. 会田実の著作からの引用・参照は、煩雑さを避けるため、「別表  
1：会田実関連著作一覧」に付した番号を用いた。
2. 引用文中の「/」は、行替えを意味する。また、引用文中の傍点は、  
原文のママである。

#### 註

- 1) 藤田和也は、この共同研究を、実践家と研究者による共同研  
究の雛型として評価する（藤田2014）。

- 2) 「作文教育年表」には、会田の忌日と、遺稿集が記されている(今井・峰地 1957)。また、会田の遺稿集は「児童詩教育年表」にも記されている(日本作文の会編 1970)。
- 3) 『魂あいふれて』に関する座談会が 1951 年 12 月に開催され、執筆者だけではなく、異聖歌や上田庄三郎らが参加した(無署名 1952a; 1952b)。会田は座談会において、「殊に若い人たちを結びつけることが第一の仕事ではないか」(無署名 1952b: 2)と発言している。会田の交流をめぐって、例えば会田は兵庫作文の会との交流している(菅原 2004)。また、会田は大田堯とも交流し(A33)、大田は会田の「ハガキ」によって、北海道の教師の千葉良雄の病を知っている(大田 1952)。小田切(2005)には、千葉から会田に宛てた「ハガキ」が紹介されている。さらに会田は、例えば歴史学者の羽仁五郎や井上清にも「ハガキ」を送っている。
- 4) 山住正己は、勝田による会田の追悼文について、「なお、『会田さんと私』には珍しく末尾に執筆年月日が入っている。引用されたダンハムの『現代の神話』の刊行は、なんと、その 2 日前の 9 月 20 日である。多忙のなかでも、魅力ある新刊書に無関心ではいられなかったのだろう。おそらく引用された一節にぶつかって、会田氏の回想文も一気に書きあげられたにちがいない」(山住 1972: 535-536)と解説している。
- 5) 本稿では、永岡治の『ある綴方教師伝』(1988 年、民衆社)の小説(伝記)としての性格に鑑みて、『ある綴方教師伝』を参考に留める。『ある綴方教師伝』によれば、雑誌『作文静岡』に掲載された会田の追悼文には、国分一太郎、戸塚廉、宮原誠一、相川日出雄、小西健二郎、寒川道夫、綿引まさ、などが執筆している。また、第 3 回全国教育研究集会の開催中の 1954 年 1 月 26 日の夜には、「会田実追悼・作文教育を語る会」——「開会のことば(下田政夫)」、「会田先生の人柄(野々山茂雄)」、「黙禱」、「挨拶(会田光子)」、「会田さんという人(大塚義人)」、「講演(大田堯、小川太郎、鶴見和子)」、「追悼座談(今井誉次郎、寒川道夫、国分一太郎、土岐兼房、戸塚廉、高橋磯一、松坂忠則、無着成恭、三上敏夫)」、「閉会のことば(後藤彦十郎)」——が開催された。ただし、管見の限り、2 つの事例に係る史料は発見されていない。
- 6) 会田に関連する著作は、これまで未整理であった。遺稿集(A75)に収録された会田の 18 本の著作のうち、書誌情報(初出)が示されたのは 7 本のみである。また、その書誌情報が誤っているものもある。そのため、「別表 1: 会田実関連著作一覧」として整理した。ただし、未定稿である。なお、掲載が確認されているものの、現物が確認できない会田の著作——例えば、志太生活教育同好会誌『ともしび』や、静岡県作文の会誌『作文静岡』に掲載の著作——は割愛した。また、遺稿集に収録されている未発表原稿も割愛した。

A3	あいだ・みのる (1948)「熊笹のこどもたち：文化とは誰のものであるかⅢ」『教育建設』19号、25-26 頁
A4	会田実(1948)「怒りの目をもやして：“陸の孤島”に關う読書生活」『日本読書新聞』435号、2 頁
A5	あいだみのる (1948)「ぼくは、君たちからまなびたい」『北海青年』3 巻 5 号、15-16 頁
A6	あいだ・みのる (1948)「現場から見た単複校の問題」『単級複式教育』2 号、20-23 頁
A7	あいだみのる (1948)「教育の敵はどこにいる? : 山村の教育ルポルタージュ」『社会圏』2 巻 6 号、41-45 頁
A8	あいだ・みのる (1948)「村に根をはれ：山村の教育・ルポルタージュ」『教育生活』8 月号、5-9 頁
A9	あいだ・みのる (1948)「山の子どもたち」『少女少女の広場』3 巻 10 号、46-47 頁
A10	あいだ・みのる (1948)「単級・複式よ、どこへゆく：主としてその歴史的位置について」『北海教育評論』1 巻 2 号、14-17 頁
A11	あいだ・みのる (1948)「ここに、そして、ここから：私の社会科の位置・スナップ」『あかるい教育』16 号、46-50 頁
A12	あいだ・みのる (1948)「雪の降る日の職員室で」『教育建設』28 号、17-18 頁
A13	あいだみのる (1948)「教師たちよ、わすれものはないのか：綴方教育連盟の業績をめぐら問題提起」『北海教育評論』2 巻 1 号、8-10 頁
A14	会田実 (1949)「洋青氏に贈る私の誠心」『えぞにう』3 巻 11 号、32-33 頁
A15	あいだ・みのる (1949)「こどもたちは、いかにして本を求めていったか」『あかるい教育』17 号、23-29 頁
A16	会田実 (1949)「つらぬいている一本の線：カマラドをよんで」『KAMARADO』19 号、32-33 頁
A17	あいだ・みのる (1949)「新教育はどのようにうけいれられているか：北海道において目立つ現象」『生活学校』4 巻 4 号、39-41 頁
A18	あいだ・みのる (1949)「俳句批評の基準はあるのか」『えぞにう』4 巻 5 号、3-4 頁
A19	あいだ・みのる (1949)「ここにこそほんとうの教師がいる：ジョン・デューイとともに歩まれたかがやく節操のひと、横澤宇宙先生にこの一文をささげる」『教育建設』32 号、22-23 頁
A20	あいだ・みのる (1949)「大衆のなかのひとりとしての『教師』」『教育と社会』4 巻 7 号、52-54 頁
A21	あいだ・みのる (1949)「こどもたちのなかの『社会科』」『新しい教室』4 巻 10 号、44-49 頁
A22	あいだ・みのる (1950)「教師の間人像の問題についての覚え書」『教育建設』42 巻、32-34 頁
A23	あいだ・みのる (1950)「教師の書いたつづり方：『離道記』さいごの一節より」『教育建設』45 号、37-38 頁
A24	島康樹 (1950)「子どもたちは知らないでいる」『教育手帖』1 巻 6 巻、50-53 頁
A25	あいだ・みのる (1950)「すぐれた先達の教えている道へ：こんにちの教師たちとつづり方をめぐら動き」『教育建設』47 号、30-31 頁
A26	島康樹 (1950)「菊江の記録」『6・3 教室』4 巻 10 号、80-84 頁(※ 2)
A27	あいだ・みのる (1950)「教育における 1930 年前後をどうまんだらよいか：現場からの問題提起」『社会科教育』35 巻、44-45 頁
A28	あいだ・みのる (1950)「ヒューマンイズムの火をかきたてまもりあつたひとびとのむれよ：中井さんの『生活カリキュラム運動の系譜』を読んで」『北海教育評論』3 巻 8 号、46-48 頁
A29	あいだ・みのる (1950)「教師からこどもへ こどもから教師へ」『児童心理』4 巻 12 号、68-70 頁
A30	あいだ・みのる (1951)「子供の喧嘩をどう処理しているか」『教育社会』6 巻 1 号、36-37 頁
A31	あいだ・みのる (1951)「教師の『貧乏』が生んだ 2 つの笑話：社会と学校と教師と家庭につながる話」『教師の友』1 巻 3 号、22-25 頁
A32	あいだ・みのる (1951)「きょうのことば」『学級経営』1 巻 11 号、47-48 頁 (※ 2)
A33	あいだ (1951)「清水だより」『北海教育評論』4 巻 4 号、31 頁
A34	あいだ・みのる (1951)「先達よ思いあがつてはいないかの：『生活綴方』の『逆もどり論』を克服するために」『北海教育評論』4 巻 5 号、20-22 頁
A35	あいだ・みのる (1951)「若い作文指導者への夢」『月刊作文研究』3 号、43-44 頁 (※ 2)

別表 1：会田実関連著作一覧

【会田実の著作】	
A1	あいだ・みのる (1947)「『文化』とは誰のものであるか：山村の人々のために」『教育建設』16 号、15-16 頁
A2	あいだ・みのる (1947)「『文化』とは誰のものであるか：組織的発言と抗議とたたかいのために」『教育建設』18 号、17-18 頁

A36	あいだみのる (1951)「教師と『たより』を書きあうことをこどもたちはどう思っているか」『実践国語』12巻132号、52-56頁
A37	あいだみのる (1951)「小学校における鑑賞の実際：詩の場合について」『実践国語』12巻137号、68-74頁
A38	あいだ・みのる (1951)「とうげの松の木」後藤彦十郎編『魂あいふれて』百合出版、248-261頁 (※2)
A39	あいだ・みのる (1951)「山びこ学校をどう学ぶか」『教育静岡』1巻2号、30-31頁
A40	あいだ・みのる (1952)「わたくしはいまこんな仕事をしています(3)」『ともしび』6号、47-49頁
A41	あいだ・みのる (1952)「生活(綴方)教育の教師 千葉良雄」『作文と教育』6号、22-24頁
A42	会田実編 (1952)『麦こき』50号
A43	あいだみのる (1952)「『齋藤さん』という人」『教育』6号、61-64頁
A44	あいだ・みのる (1952)「わたくしはいまこんな仕事をしています(4)」『ともしび』7号、27-28頁
A45	あいだ・みのる (1952)「この子だれの子:ある遅進児のために」『教育手帖』24号、29-33頁
A46	清川安彦・原国雄・野末茂・清水鑿一・木村愛一・あいだ・みのる・大久根喜代次 (1952)「児童憲章と教育の現場(座談会)」『教育静岡』2巻5号、44-51頁
A47	あいだ・みのる (1952)「わたくしはいまこんな仕事をしています」『ともしび』8号、25-32頁
A48	あいだ・みのる (1952)「わたくしの綴方教育論」『教育静岡』2巻7号、52-54頁
A49	会田みのる (1952)「わたくしはいまこんな仕事をしています(6)」『ともしび』9号、9-14頁
A50	あいだ・みのる (1952)「北海道をとりこえさせたことの罪ほろぼしのために:職場の記録集『石垣』についての報告」『北海道作文』2号、3-10頁
A51	あいだ (1952)「文集ばなし:ペン引つぎの弁」『教育静岡』2巻12号、30-31頁 (※2)
A52	あいだ・みのる (1952)「書評:石田和男編 (1952)『夜明けの子ら』春秋社」『教育静岡』2巻12号、表紙裏
A53	あいだ・みのる (1952)「北海道をとりこえさせたことの罪ほろぼしのために:職場の記録集『石垣』についての報告(2)」『北海道作文』3号、3-6頁 (※1)
A54	あいだ・みのる (1953)「文集ばなし:『土くれ』富士郡野上小・武蔵吉金」『教育静岡』3巻1号、17頁 (※2)
A55	あいだ (1953)「書評:『綴方風土記(第2巻 東北篇)』」『教育静岡』3巻1号、32-33頁
A56	会田実 (1953)「作文の会だより」『作文と教育』14号、48頁
A57	あいだ・みのる (1953)「書評:宮原誠一編『日本の教師(岩波講座教育第8巻)』岩波書店」『教育静岡』3巻2号、45頁
A58	あいだ・みのる (1953)「文集ばなし:『あゆみ』磐田群田原小・鈴木文雄」『教育静岡』3巻2号、42-43頁 (※2)
A59	あいだ・みのる (1953)「文集ばなし:『はだかの子』小笠原横須賀小・伊藤正一郎」『教育静岡』3巻3号、24-25頁
A60	あいだ・みのる (1953)「文集ばなし:『山の子』安部群玉川小・長島み江」『教育静岡』3巻4号、30-31頁
A61	あいだ・みのる (1953)「文集ばなし:『すえひろやま』駿東群裾野東小・杉山英男」『教育静岡』3巻5号、64-65頁
A62	あいだ・みのる (1953)「文集ばなし:『あしあと』伊東市東小・浜野幸子」『教育静岡』3巻6号、58-59頁
A63	あいだ・みのる (1953)「文集ばなし:『星の子』浜名群新居群小・加藤孝雄」『教育静岡』3巻7号、32-33頁
A64	会田実 (1953)「小さな教育技術をめぐって」『教師の友』26号、15-17頁
A65	あいだ・みのる (1953)「北海道をとりこえさせた罪ほろぼしのために:職場の記録集『石垣』についての報告(3)」『北海道作文』6号、3-8頁
A66	あいだ・みのる (1953)「文集ばなし:『杉の子』田方群土肥小・永岡治」『教育静岡』3巻9号、68-69頁
A67	あいだ・みのる (1953)「わたくしはいまこんな仕事をしています(10)」『ともしび』14号、13-15頁
A68	会田実 (1953)「無題(北から南から)」『ともしび』14号、35頁
A69	あいだ・みのる (1953)「文集ばなし:『あおぞら』志太郡葉梨中・井沼一」『教育静岡』3巻10号、40-41頁 (※2)
A70	あいだ・みのる (1953)「文集ばなし:『はちのす』静岡市安東小・田中真理子」『教育静岡』3巻11号、28-29頁

A71	あいだ・みのる (1953)「文集ばなし:『こうま』賀茂郡南中小・山田春代」『教育静岡』3巻12号、50-51頁 (※2)
A72	あいだ・みのる (1953)「文をなやすことと心をなやすこと」日本作文の会編『よい作文の書き方(6年生)』鶴書房、161-174頁
A73	あいだ・みのる (1954)「北海道をとりこえさせたことの罪ほろぼしのために」『北海道教育評論』7巻2号、126頁
A74	静岡県作文の会協議会編 (1954)『教師:その生きる道』静岡図書
A75	会田実 (1986)『教師:その生きる道(復刻版)』復刻版刊行委員会
<b>【会田実の追悼文】</b>	
	無署名 (1954a)「会田実氏急逝」『北海道作文』9号、10頁
	齋藤健一 (1954)「トンマ先生:あいだ・みのるさんについて」『教育』30号、80-81頁
	後藤彦十郎 (1954)「静岡県作文教育協議会生みの親 会田実氏の急逝を悼む」『作文と教育』23号、87頁
	大塚義人 (1954)「会田さんのことば」『作文と教育』24号、42-43頁
	加茂茂 (1954)「教育を愛する人」『作文と教育』24号、43頁
	むさし・よしかね (1954)「手紙をかくことと足でかせぐこと」『作文と教育』24号、43頁
	中村さと (1954)「病室で」『作文と教育』24号、43-44頁
	笠原和一 (1954)「温いげまし」『作文と教育』24号、44頁
	鈴木文雄 (1954)「会田さんに学ぶ」『作文と教育』24号、45頁
	おかむら・たもつ (1954)「あいださんに学ぶ」『作文と教育』24号、45-46頁
	三上敏夫 (1954)「会田先生のこと」『作文と教育』24号、46-47頁
	黒田平 (1954)「ありがたき先生」『作文と教育』24号、47頁
	会田光子 (1954)「無題」『作文と教育』24号、46-47頁
	永松武生 (1954)「会田実先生のこと」『北海道教育評論』7巻2号、127-128頁
	五井治保 (1954)「あいだ・みのる氏の思い出」『北海道教育評論』7巻2号、128頁
	勝田守一 (1954)「会田さんと私」静岡県作文の会協議会編『教師:その生きる道』静岡図書、16-27頁
	今井善次郎 (1954a)「似ていること」静岡県作文の会協議会編『教師:その生きる道』静岡図書、28-32頁
	横沢宇宙 (1954)「あの頃の思い出」静岡県作文の会協議会編『教師:その生きる道』静岡図書、33-36頁
<b>【会田実に関連する論考・史料】</b>	
	坂本亮 (1947)「教師に文化を:あいだ・みのる君に」『教育建設』17号、19頁
	坂本亮 (1949)「北海道綴方連盟史のことをかくに当つて、あいだ君に」『北海道教育評論』2巻2号、14-15頁
	高沢重風 (1949)「俳句に於ける階級性:会田実氏に答える」『えぞにう』4巻3号、3-7頁
	ちば・よしお (1951)「先達の光ある業績に:あいだ・みのる君への書信」『北海道教育評論』4巻4号、20-23頁
	紅林晃・あいだ・みのる・坂本亮・木村司 (1952)「千葉良雄氏の遺稿が出版されることについて全道の教師諸兄に訴える」『北海道教育評論』5巻5・6号、48頁
	H (1952)「教室訪問:笑える子どもにする(清水・駒越小・会田実学級)」『教育静岡』2巻9号、48-49頁
	秋元忍 (1952)「文集ばなし:清水市駒越小会田学級『麦こきの弟』」『教育静岡』2巻11号、26-27頁
	K (1954)「編集後記」『教育』29号、100頁 (※3)
	今井善次郎 (1954b)「美しい道:あいだ君の思出」『作文と教育』24号、62頁
	無署名 (1954b)「会田実遺稿集について」『作文と教育』28号、64頁
	野々山茂雄 (1954)「序にかえて」静岡県作文の会協議会編 (1954)『教師:その生きる道』静岡図書、2-3頁
	静岡県作文の会協議会 (1954)「あとがき」静岡県作文の会協議会編 (1954)『教師:その生きる道』静岡図書、199-200頁
	富田博之 (1954)「教師の本棚:『教師—その生きる道』」『教育静岡』5巻2号、54頁
	無署名 (1955)「本の紹介:静岡作文の会協議会編『教師:その生きる道』」『作文と教育』33号、44-45頁
	武蔵吉金 (1958)「会田実」日本作文の会編『生活綴方事典』明治図書出版、614頁
	永岡治 (1985)「資料(故会田実先生に関する)お持ちの方ご教示ください」『作文と教育』420号、10頁

無署名(1985)「会田実著『教師—その生きる道』ぜひと復刊しよう!」『作文と教育』429号、9頁	
大塚義人(1986)「眼は地上遥かに歩みは足もとから! : 会田実さんの人柄と実績」会田実『教師：その生きる道(復刻版)』復刻版刊行委員会、245-258頁	
無署名(1986)「会田実略年譜」会田実『教師：その生きる道(復刻版)』復刻版刊行委員会、260-261頁	
永岡治(1986)「あとがき」会田実『教師：その生きる道(復刻版)』復刻版刊行委員会、262-263頁	
永岡治(1988)「ある綴方教師伝：会田実の生涯」民衆社	
【備考】	
※1	「北海道作文」第3号の奥付には、印刷「昭和28年12月23日」、発行「昭和28年12月25日」とある。しかし、五井保の「あとがき」には、「昭和27年12月22日夕」と記されている。また、続号の発行日等を勘案し、奥付の「昭和28年」は誤記であると判断した。
※2	会田実の著作欄において「※2」が付された著作は、遺稿集(A74; A75)に、その一部ないしは全部が収録されている。
※3	雑誌『教育』の「編集後記」における「K」は、雑誌『教育』編集長(当時)の勝田の署名である(北田1956)。

- 7) 本稿では、①管見の限り、会田の著作が戦後に限定され、戦前・戦中の著作は発見されていないこと、②会田は戦後においても戦前・戦中の教育実践について詳述していないこと、の2点に鑑み、戦後の教育実践を対象とする。なお会田は、戦前・戦中の自身のあり方を「反省」しており、当時の情勢に対して少なくとも「無批判」であったと推察される。
- 8) 「表1：会田実の略歴」は、「会田実略年譜」(無署名1986：260-261)、「会田実年譜」(永岡1988：278-285)をもとに、会田の著作と各学校史等を参照し、作成した。なお、学校名は会田の入学時または着任時の名称を用いた。
- 9) 会田の退任年月は、1940年3月である(北海道白糠町立小学校編1974：62)。
- 10) 会田の在職期間は1948年3月から1949年7月である(記念誌編集委員会編1997：45)。ただし会田は、江別第一中学校への着任を1948年の「5月12日」と記している(A11：46)。なお、会田の前任校の茂雪裡国民学校の歴代教職員名簿において、会田光子の在職期間は1946年11月から1948年5月となっている(無署名1993：77)。
- 11) 会田の在職期間は、1950年より4年間となっている(駒越小学校開校100年記念事業委員会編1974：85)。
- 12) 横沢は、後に阿寒町教育委員会の教育長を務めた北海道の教師である。横沢は1933年から1939年まで白糠第一尋常高等小学校長を(北海道白糠町立小学校編1974)、1943年から1947年まで厚岸国民学校長を務め(厚岸小学校開校80周年記念祝賀会事業部編1959)、会田と職場を同じくする。会田は、デューイ(J. Dewey)の教育学に傾倒していた横沢を介してデューイの教育学に触れている(A19)。
- 13) 坂本亮(坂本亮人；坂本磯穂；赤座紋平)こと坂本亀松は、1935年8月に北海道綴方教育連盟を結成し、1940年から翌1941年にかけて起こった北海道綴方教育連盟事件において治安維持法違反で検挙された教師である。かつて寒川は、坂本が「生活から学ぶ」という点を強調しなかったと指摘し、中野光は北海道綴方教育連盟と北方性教育運動との隔たりを指摘している(寒川・中野1971)。なお、坂本の経歴は中内(1975)、木村(2001)を参照のこと。また、北海道綴方教育連盟については船山(1987)、船橋(1992)、岡屋(2002)を参照のこと。
- 14) この時期の会田は、『日本菟書家名簿』に「国語、国文学、一般文学、全集、講座」の蒐集家として掲載されている(日本古書通信社編集部編1938：172)。
- 15) 会田と同時期に勤務した人物に「花井道子」——1935年着任、1936年5月退任——がいる(北海道白糠町立小学校編1974：62)。おそらく「花井道子」は、「花井光子」の誤記である。
- 16) 卒業生名簿より、会田は1942年と1943年に卒業の学級を担当している(無署名1978：128)。
- 17) 卒業生名簿より、会田は1946年と1947年に卒業の学級を担当している(無署名1993：110)。
- 18) 茂雪裡小学校史には、学校教育目標が整理されている(無署名1993：33)。1946年度は、「民主教育の研究」——学級経営の仕方、学習形態の研究、教師と児童の関係、児童同士の関係——と、「児童のための楽しい学校」——児童の気持ちを大切にす——が示されている。1947年度は、「子供達のための楽しい学校」——子供を中心にした教室経営——と、「自分たちのことは自分たちの手でする学校」が示されている。
- 19) 1946年4月に「父母と先生の会」が発足している(無署名1993：19)。また同年には、第2回母親学級の日に児童学芸会が開催され、好評であったという(無署名1993：20)。
- 20) 『麦こきの弟』については、秋元(1952)を参照のこと。『石垣』については、広川(1955)、むさし(1956)を参照のこと。また、会田の影響によって「一枚文集」をはじめめる同僚もいた(斎藤勤次郎1953)。
- 21) 複数学年を1学級としたものを複式学級、1つの複式学級のみで編成された学校を単級学校という。
- 22) 1953年に刊行された「文をなすことと心をなすこと」は、内容および子どもの名前を勘案すれば、1951年度の実践記録である。したがって、1953年度に受持った子どもを中心とした実践記録は刊行されていない。
- 23) 「菊江の記録」には、『6・3教室』に掲載されたものと、遺稿集に収録されたものとの2つの版がある。細部の表現に違いが見られるものの、構成は概ね一致している。
- 24) 「きょうのことば」には、『学級経営』に掲載されたものと、遺稿集に収録されたものとの2つの版がある。『学級経営』版(A32)には、「あとがき」が記されている。
- 25) 「骨なしの子」は斎藤健一(1952)や奥平(2008)を参照のこと。
- 26) 会田は、「最近、ある雑誌から『若い作文指導者へのことば』を書け」(A25：30)と言われたという。ここから、「若い作文指導者へのことば」すなわち「若い作文指導者への夢」が依頼原稿であったと推察される。

#### 引用文献

- (「別表1：会田実関連著作一覧表」に示した文献は省略した)
- 厚岸小学校開校80周年記念祝賀会事業部編(1959)『厚岸小学校開校80周年記念誌』厚岸小学校開校80周年記念祝賀会。
- 伊藤和実(2001)「生活に根ざした子どもの解放と仲間づくり」日本作文の会編『日本の子どもと生活綴方の50年』ノエル、46-51頁。
- 伊藤定雄(2005)『生活綴方の継承と発展の軌跡』私家版。
- 井沼一(1992a)「静岡県の作文教育」静岡県作文の会協議会編『心

- ゆらし育ちあう子ら』福教社、216-235 頁。
- 井沼一 (1992b) 「生活綴方の伝統に根ざし 40 年」『作文と教育』514 号、70-73 頁。
- 今井誉次郎 (1950) 『農村社会科カリキュラムの実践』牧書店。
- 今井誉次郎 (1957) 「作文教育の広まり」今井誉次郎・峰地光重『作文教育』東洋館出版、267-278 頁。
- 今井誉次郎・峰地光重 (1957) 『作文教育』東洋館出版。
- 江口季好 (2001) 「日本作文の会創生期の各地の動向」日本作文の会編『日本の子どもと生活綴方の 50 年』ノエル、71-79 頁。
- 大田一郎 (1949) 「各界戦後の新人 (教育界)」『新しい教育と文化』3 巻 1 号、60-63 頁。
- 大田堯 (1952) 「千葉良雄の死を悼む」『教育』4 号、50 頁。
- 大塚よしと (1981) 「戦後・静岡の創世記ひとこま」『作文と教育』368 号、143-145 頁。
- 岡屋昭雄 (2002) 「生活綴方成立史の研究」『教育学部論集』13 号、13-31 頁。
- 奥平康照 (2008) 「戦後生活綴方教育全盛の時代」『和光大学現代人間学部紀要』1 号、7-24 頁。
- 小田切正 (2005) 『北海道民間教育運動史 (下)』北海道民間教育研究団体連絡協議会。
- 梶村光郎 (1993) 「戦後生活綴方の歴史」日本作文の会編『学級文集の研究 (戦前・戦後 日本の学級文集 別巻)』大空社、29-41 頁。
- 北田 (1956) 「無題 (編集後記)」『教育』65 号、124 頁。
- 記念誌編集委員会編 (1997) 『純誠 (江別市立江別第一中学校開校 50 周年記念誌)』江別市立江別第一中学校開校 50 周年記念協賛会。
- 木村元 (2001) 「坂本亮」久保義三・米田俊彦・駒込武ほか編『現代教育史事典』東京書籍、496 頁。
- 後藤彦十郎編 (1951) 『魂あいふれて』百合出版。
- 駒越小学校開校 100 周年記念事業委員会編 (1974) 『駒越小学校開校 100 周年記念写真集『駒越』』駒越小学校開校 100 周年記念事業委員会。
- 斎藤勘次郎 (1953) 「一枚文集『いちご』をはじめてみて」『作文と教育』16 号、8-11 頁。
- 斎藤健一 (1952) 「めざめゆく子どもたち」『教育』6 号、54-60 頁。
- 斎藤正男 (1952) 「第 1 回教育科学研究全国協議会を司会して」『教育静岡』2 巻 5 号、41 頁。
- 寒川道夫・中野光 (1971) 「30 年代と 70 年代の教育」『小四教育技術』23 巻 14 号、60-67 頁。
- 菅原稔 (2004) 『戦後作文・綴り方教育の研究』溪水社。
- 田中孝彦 (2009) 『子ども理解』岩波書店。
- 道作 50 年史編集委員会編 (2005) 『北国の子どもとともに』北海道作文教育協議会。
- 中内敏夫 (1975) 「坂本亮」民間教育史料研究会編『民間教育史研究事典』評論社、364 頁。
- 永岡治 (1993) 「『北豆作文の会』のころ」日本作文の会編『学級文集の研究 (戦前・戦後 日本の学級文集 別巻)』大空社、130-134 頁。
- 日本古書通信社編集部編 (1938) 『日本蒐書家名簿 (昭和 13 年版)』日本古書通信社。
- 日本作文の会編 (1958) 『生活綴方事典』明治図書出版。
- 日本作文の会編 (1970) 『児童詩教育事典』百合出版。
- 広川芳夫 (1955) 「教師の文集」『教育静岡』5 巻 4 号、64-65 頁。
- 藤田和也 (2014) 「教育実践を理論化・一般化するいとなみ」教育科学研究会編『戦後日本の教育と教育学 (講座 教育実践と教育学の再生 別巻)』かもがわ出版、194-216 頁。
- 船橋一男 (1992) 「戦前生活綴方運動の地域的展開」『立教大学教育学研究科研究年報』36 号、95-107 頁。
- 船橋一男 (2001) 「生活綴方」久保義三・米田俊彦・駒込武ほか編『現代教育史事典』東京書籍、440-441 頁。
- 船山謙次 (1987) 「北海道における民教運動の発展」鈴木朝英・小田切正監修『戦後北海道教育運動史論』あゆみ出版、17-61 頁。
- 北海道作文教育協議会編 (1964) 『戦後北海道作文教育史 (運動篇)』私家版。
- 北海道白糠町立小学校編 (1974) 『白糠小学校開校 90 周年記念誌』白糠町立小学校創立 90 周年記念協賛会。
- むさし・よしかね (1956) 「教師集団の文集活動」『教育静岡』6 巻 6 号、64-67 頁。
- 無署名 (1951) 「日本綴方の会同人名簿 (2)」『月刊作文研究』5 号、58-59 頁。
- 無署名 (1952a) 「生活綴方的教育語る『魂あいふれて』に集う会 (上)」『日本教育新聞』786 号 (1952 年 1 月 8 日)、2 頁。
- 無署名 (1952b) 「生活綴方的教育語る『魂あいふれて』に集う会 (下)」『日本教育新聞』787 号 (1952 年 1 月 10 日)、2 頁。
- 無署名 (1952c) 「教育人国記」『教育静岡』2 巻 11 号、34-35 頁。
- 無署名 (1978) 『開校 50 周年記念誌』北海道釧路市立共栄小学校開校 50 周年記念事業協賛会。
- 無署名 (1983) 「あとがき」日本作文の会編『静岡 (日本の子どもの詩 22)』岩崎書店、107-109 頁。
- 無署名 (1993) 『茂雪裡 (開校 70 周年記念誌)』鶴居村立茂雪裡小学校開校 70 周年記念協賛会。
- 無着成恭編 (1951) 『山びこ学校』青銅社。
- 山住正己 (1972) 「解説」勝田守一『教育研究運動と教師 (勝田守一著作集 第 3 巻)』国土社、532-541 頁。
- 山田清人・大田堯・勝田守一 (1952) 「抑圧された部落社会」『教育』6 号、65-73 頁。